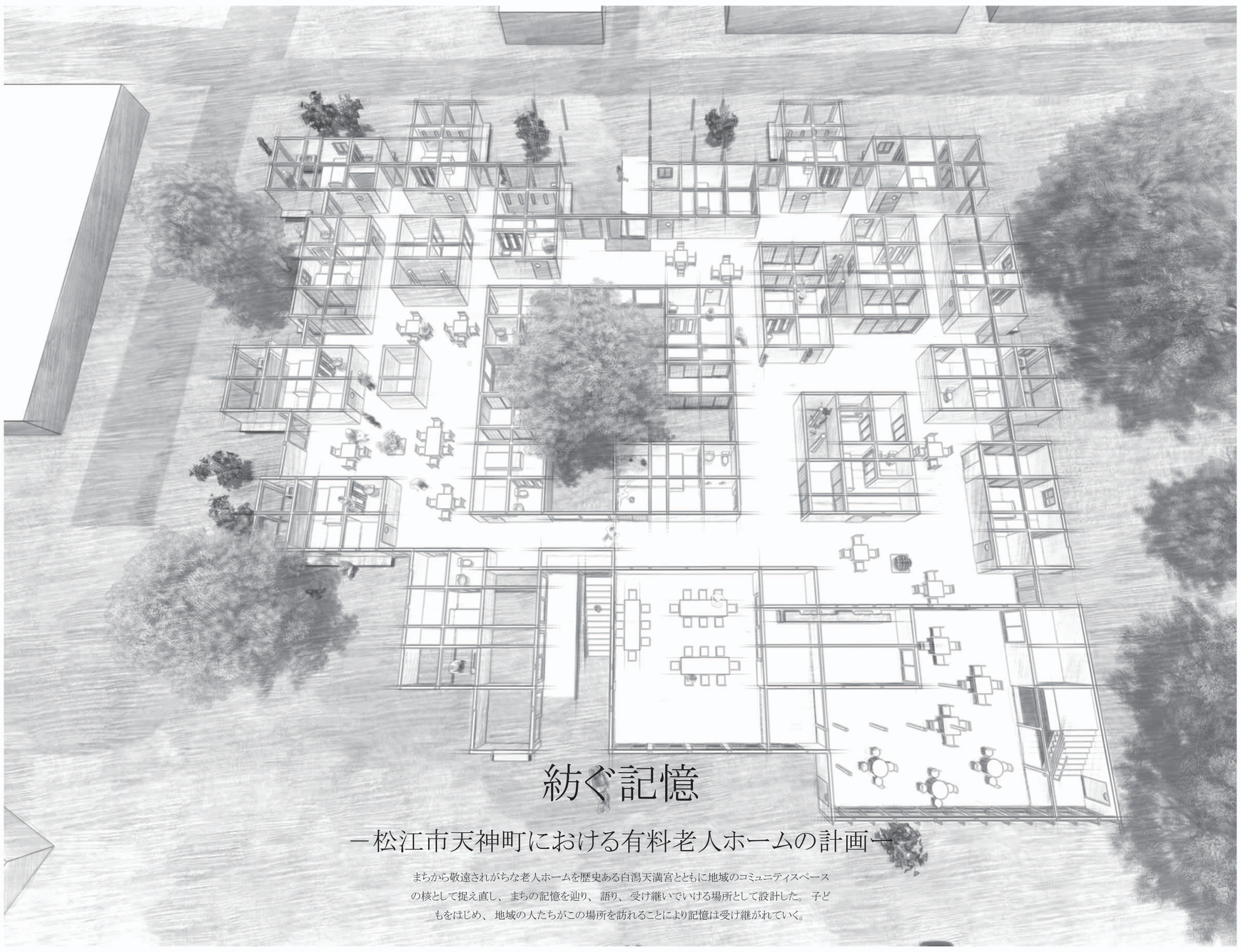


紡ぐ記憶

ー松江市天神町における有料老人ホームの計画ー

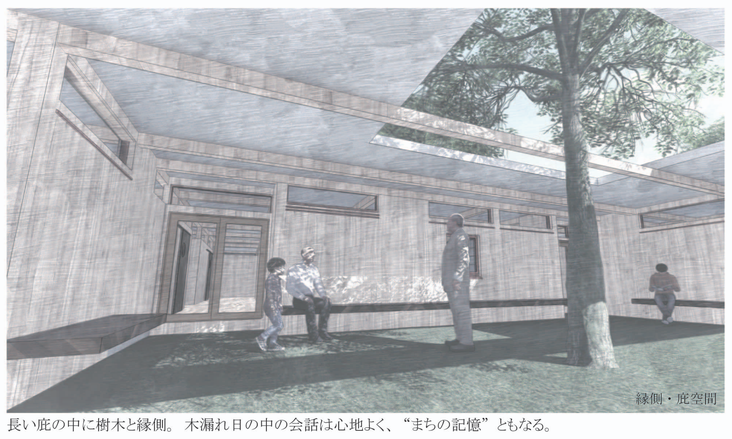
まちから敬遠されがちな老人ホームを歴史ある白潟天満宮とともに地域のコミュニティスペースの核として捉え直し、まちの記憶を辿り、語り、受け継いでいける場所として設計した。子どもをはじめ、地域の人たちがこの場所を訪れることにより記憶は受け継がれていく。

おばあちゃん食堂

居住者自身で運営。老人ホーム内で稼げる仕組みで持続可能な建築を目指すとともに、居住者の健康にも留意。

共有スペース

個室の配置から形成された豊かな内部空間。天井高を少し上げ、ハイサイドライトを取り込む。



縁側・庇空間

長い庇の中に樹木と縁側。木漏れ日の中の会話は心地よく、“まちの記憶”ともなる。

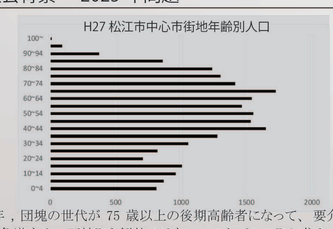
1. 敷地　- 松江市天神町 -

本設計の敷地は松江市天神町である。周辺環境として、白潟公園・宍道湖・広場・天神川・商店・寺町・神社などさまざまな要素が散りばめられている。保育園やデイサービス・障碍者施設も集中しており、コンテンツが豊富である。

2. 歴史　- 積層された記憶 -

天神町は深い歴史が刻まれたまちである。松江は江戸時代、城下町として発展したことでよく知られており、現在もそのまち割りがはっきりと残されているが、天神町をはじめ、白潟・末次の地区ではそれ以前から水上交通が発達しており、松江の要として商業を中心に機能していた。

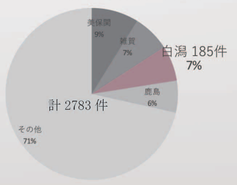
3-1. 社会背景　-2025 年問題 -



2025 年，団塊の世代が 75 歳以上の後期高齢者になって、要介護高齢者人口が急増する。天神町も例外ではない。これはこの町に住む、この街を知っている人たちが次第にいなくなってしまうことを意味している。

3-1. 社会背景　- まちの衰退 -

松江市における空き家件数の実態 (H28)



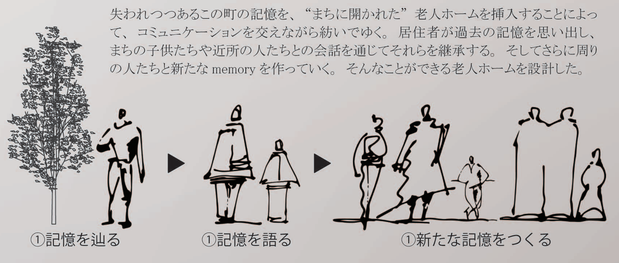
天神町を含む白潟地区では現在、空き家の割合が市内で 29 地区中 3 番目に高い。まちから人が流出傾向にあることが読み取れる。

4. 課題 - 記憶の継承 -

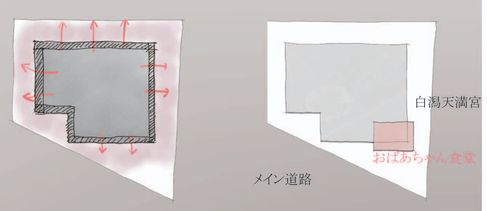
天神町に住んでいた人々が高齢化し、松江の昔の姿が語られぬまま歴史ある街が風化しようとしている。人とまちが同時に消えたり、このままでは土地の記憶が消えてしまう。土地の記憶を継承させるにはどうすればよいか。

5. コンセプト　- 記憶を辿り、受け継ぎ、つくっていける空間 -

失われつつあるこの町の記憶を、“まちに開かれた”老人ホームを挿入することによって、コミュニケーションを交えながら紡いでゆく。居住者が過去の記憶を思い出し、まちの子供たちや近所の人たちとの会話を通じてそれらを継承する。そしてさらに周りの人たちと新たな memory を作っていく。そんなことができる老人ホームを設計した。



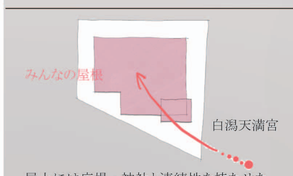
6-1. 提案 - 配置計画 -



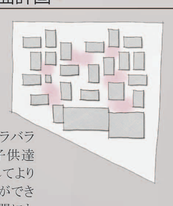
外部空間がオープンなコミュニティスペースとなるよう、施設を中央に配置。軒を長く出し、庇下の縁側空間を設ける。

メイン道路・神社敷地に面するようにおばあちゃん食堂を配置。地域の人々との語らいの場とした。

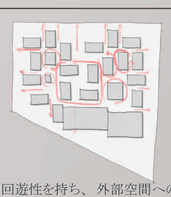
6-2. 提案 - 平面計画 -



屋上には広場・神社と連続性を持たせた公園「みんなの屋根」を計画。お年寄りが子供や親世代との交流を図るとともに、子供時代の記憶を辿るきっかけを設ける。

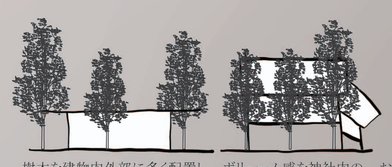


全居室を離してバラバラに配置。地域の子供達との語らいの場としてより深みのある庇空間ができると同時に内部空間にも豊かさが生まれる。



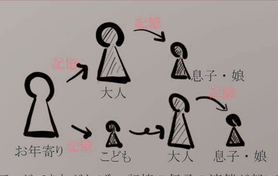
6 つの回遊性を持ち、外部空間への視線の抜けを多く設けることで、居住者はまちを歩き、近所の友達と話すという感覚を擬似体験できる。

6-3. 提案 - 立面計画 -

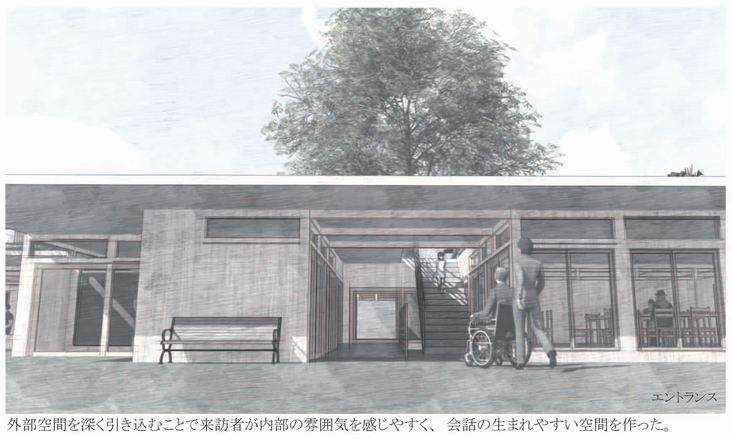


樹木を建物内外部に多く配置し、ボリューム感を神社内のものと合わせる。また建物を平屋としてボリュームを抑えることで神社敷地との一体化を図った。

7. 波及効果



お年寄りとのコミュニティができあがれば、記憶の伝承の連鎖が起こる。大人から子どもへ、また子供が成人してそのまた子どもへ。伝承された記憶だけでなく、自らの記憶も織り交ぜながら次の世代へ受け継いでいき、まちの記憶は豊かになっていく。

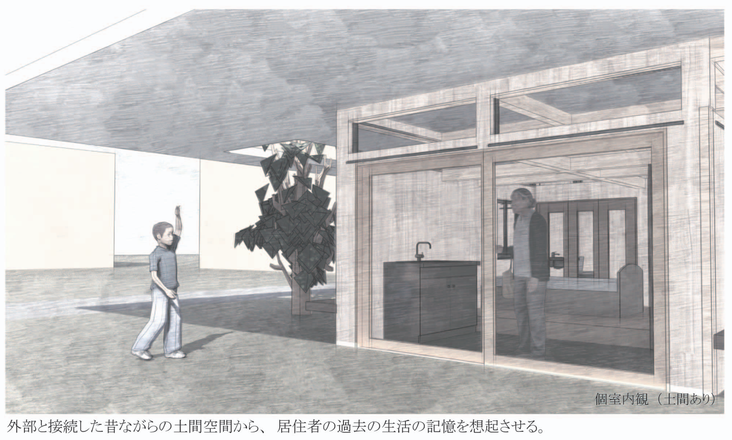


エントランス

外部空間を深く引き込むことで来訪者が内部の雰囲気を感じやすく、会話の生まれやすい空間を作った。

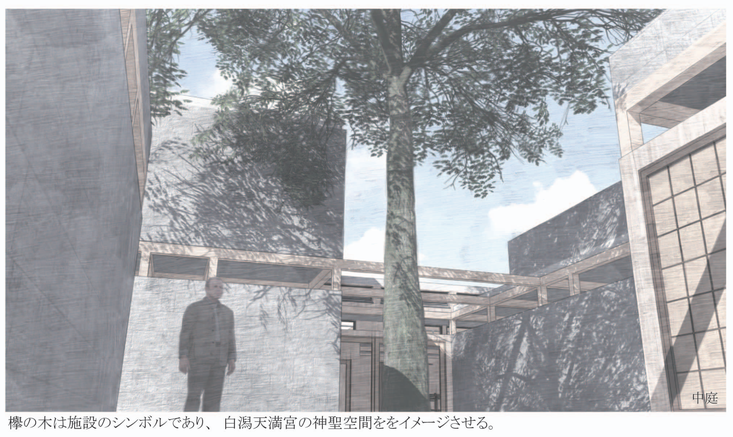
個室内観（和室）

障子によって区切られた和室を設けることで、居住者の過去の民家らしい生活の記憶を想起させる。



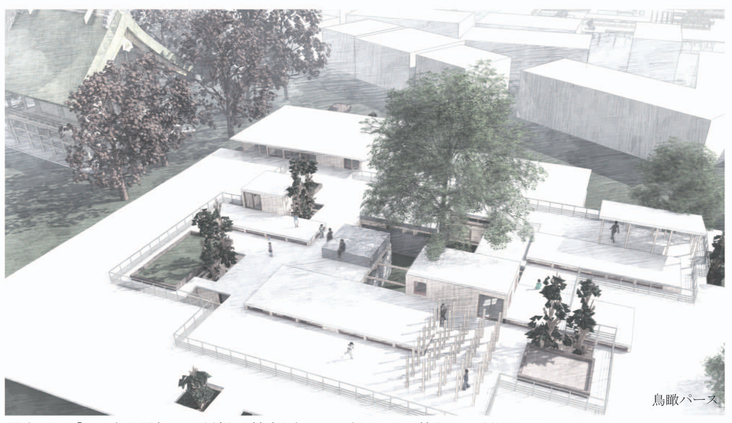
個室内観（土間あり）

外部と接続した昔ながらの土間空間から、居住者の過去の生活の記憶を想起させる。



中庭

欅の木は施設のシンボルであり、白潟天満宮の神聖空間ををイメージさせる。



鳥瞰パース

屋上公園「みんなの屋根」。地域との接点となり、小さい頃の記憶をよみがえらせる。。